



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地域における「負の存在」の利用促進によるまちづくり : 紋別市の流氷の資源化プロセスにみる「雪氷観光」創造の事例
Author(s)	福山, 貴史
Description	公益社団法人日本都市計画学会北海道支部 平成30年度研究発表会 2018年10月27日 北海道大学工学部 A棟 2階アカデミックラウンジ1・2
Issue Date	2018-10-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/79008
Type	conference paper
File Information	2018_abstract_fukuyama.pdf





福山 貴史*
Takafumi Fukuyama*

Keywords: 負の存在, 価値創造, 資源化プロセス, 雪氷観光, まちづくり

1. はじめに

人間はこれまで自然から雪氷災害を受けてきた。積雪害、着雪害、雪圧害を始め、地吹雪や雪崩は幾度も人名を奪い、社会、経済、生活環境を混乱させてきた。特に積雪寒冷地域において、雪氷は「厄介者」として認識されてきた歴史がある。一方現代では、山形蔵王の「アイスモンスター」や青森県五所川原市の「地吹雪ツアー」のように、人間は逆転の発想などを用いて、雪氷を観光資源として利活用している。つまり、本研究で検討する「雪氷観光」を創造することで、地域の厄介者を克服し、プラスの地域資源として利用する動きが見られる。

こうした地域のマイナスの要因をプラス要因に転換する観光創造の動きは、いわゆる観光まちづくりや地域づくりに繋がっている。このような地域の「負の存在」を、利用可能な正の資源に転換するメカニズムが分かれば、他地域の厄介者の資源化に応用させ、まちづくりに貢献し得るのではないかという課題意識に、本研究は基づいている。

2. 研究の目的と方法

そこで、本研究では、地域の負の存在を正の資源として利用を促進するプロセスを明らかにした上で、その過程がまちづくりの促進要因としての機能を果たし得ることを示唆する。なお負の存在とは「地域の生活環境や社会、経済に何らかの不利益を与えるか、またはその可能性のある存在であり、そのことが地域住民に一定程度共有されており、また特定の社会集団にとって正当化したくない存在」と、本研究においては定義する。

研究の方法として、地域の厄介者を代表する雪氷を利活用した観光創造プロセスの分析を通じ、負の存在の価値創造による利用促進とまちづくりへの発展過程を考察する形をとった。そのため、かつて地元で「白い魔物」とされていた紋別市の流水の観光資源化の過程を事例として取り上げた。ヒアリングや郷土史等文献調査などを実施した。

3. 調査結果と分析

水産都市である紋別市では、1950年代頃より、地元の漁業関係者の生業に直接マイナスの影響を与えていた流水を、別の視点からプラスに捉える人物が現れた。それは例えば、当時の紋別高校に美術教師として横浜市から赴任した村瀬

真治である。村瀬は流水との最初の出会いで感銘を受け、生涯に亘り数千点の流水画を描き続けた。また、極寒に閉ざされた冬を明るく照らそうと関係者と共に「もんべつ流水まつり」を提唱した地元の活動家、田中峰雲がいる。田中はさらに「流水物語」という「アイヌと流水」をテーマにした紙芝居を独自に創作し披露した。さらに流水研究の第一人者とされた青田昌秋は、それまで知られてなかった流水のプラスの生態的機能を自然科学的に実証した。青田らの研究成果は、例えば北方圏国際シンポジウムで発表され、流水の正の価値は広く伝達され、社会的に共有された。

こうした調査結果を含め、地域の内発的かつ多様な取り組みを分析すると、流水の資源化の過程では、下図に示すメカニズムが促進要因として機能していることが分かった。

	価値づけ	価値の伝達
人文科学的	Cultural Branding (文化的ブランディング) 流水画 流水まつり 等	Cultural Marketing (文化的マーケティング) 日曜絵画教室 オホーツク流水展 等
自然科学的	Scientific Branding (科学的ブランディング) アイス・アルジー 流水の機能研究 等	Scientific Marketing (科学的マーケティング) 北方圏国際シンポジウム オホーツク海沿道調査事業推進協議会 等

図1 流水の観光資源化のメカニズム

出所) 福山 (2015) に基づき筆者作成

資源化を促進した地域の取り組みは、先ず人文科学と自然科学の2つの領域に分かれ、また別視点から、価値づけと価値の伝達のアプローチ別に区分でき、その4分類の構造を図1で示した。また、各キーマンは、流水の価値向上のために連携や協働を図り、流水の資源化を促進した。そして1982年、紋別市は流水都市宣言を採択するまでに至った。

資源論の大家であるジンマーマン (1985) は、資源化の過程には「文化的欲望」と「科学・技術を含む能力」があるとし、また敷田 (2009) は、観光まちづくりを成功させるためには、ブランディングとマーケティングを上手く組み合わせることが有効としているが、これらの考え方は、いずれも雪氷観光創造の本研究において、援用可能である。

参考文献

- 1) ジンマーマン, 石光亨訳, 1995: 資源サイエンス
- 2) 敷田麻実ほか, 2009: 観光の地域ブランディング